

県内有数規模の社有林を所有し、上質の八溝材を産出する帝国造林。国産材価格の長期低落が続く中、ヒノキ残材を活用した「猫砂」製造による経営安定化の取り組みが評価され、昨年度の農林水産祭(農水省など共催)林産部門で日本農林漁業振興会長賞を受賞した。

(聞き手 早川茂樹)

### 帝国造林

(造林業)

### 植竹 雅弘社長(45)

「創業時に買った大田原市(旧黒羽町)南方地区の545畝のほか、北野上地区に300畝ある。8割が杉、2割がヒノキ。現在も近隣で売り物が出れば、買っている」

「社有林の規模は。創業時に買った大田原市(旧黒羽町)南方地区の545畝のほか、北野上地区に300畝ある。8割が杉、2割がヒノキ。現在も近隣で売り物が出れば、買っている」

「農林水産祭で評価を得た輪伐期施業とは。毎年、樹齢70年前後の伐採期の山林を7〜8畝ずつ皆伐し、またその場所に苗木を植えて、育てていく方法で、毎年均等に、継続的に木材を産出できる」

「販売先は。地元の製材業者のみ。伝統的な立木取引で高品質の木材を、市場より有利に販売している。伐採したその場で葉枯らし(自然乾燥)

を行うことで、色合いもよくなり、高い付加価値が生まれる」

「苗木代と苗木を植える手間でマイナスになる。補助金もあるにはある。木材価格は30年前あるが、70年手入れのピーク時に比べ、杉て、ようやく商品になったと聞く。林業経営は厳しそうだ。」

「伐採で出る利益は、苗木代と苗木を植える手間でマイナスになる。補助金もあるにはある。木材価格は30年前あるが、70年手入れのピーク時に比べ、杉て、ようやく商品になったと聞く。林業経営は厳しそうだ。」

「伐採で出る利益は、苗木代と苗木を植える手間でマイナスになる。補助金もあるにはある。木材価格は30年前あるが、70年手入れのピーク時に比べ、杉て、ようやく商品になったと聞く。林業経営は厳しそうだ。」

「先代社長は母。後継者難で三男の私が継いだ。継ぎたいが、林業だけではつ物を固めて処理する必要がある。猫砂を選んだ理由は、原木シイタケ生産もや

「造林業を維持するに、経営多角化が必要だった。と。」

「約2年の準備、試作を経て、昨年度からO E M(相手先ブランドによる生産)を含め月産3万袋(1袋8畝)の出荷体制ができ、利益が出始めた。売上高は3千万円で、林業とほぼ肩を並べた。今後は弊社のノウハウで業務提携やフランチャイズ展開を進め、5年後に全国シェア10%を目指す」

「ピノキには消臭、抗菌作用があり、猫砂に格好の原料。毎年30畝の間伐で生じる残材も有効活用できる。猫砂は年間500億円市場。使用後の廃棄が困難な鉱物(ベントナイト)を原料とする商品が多い。ヒノキを粉砕し、ペレット化した猫砂は、トイレに流せるし、焼却もできる優位性からシェア拡大が可

「山を守る人材の雇用を確保するためにも、猫砂製造に参入した」という植竹社長(左から2人目)と大田原市南方の猫砂製造プラント

# 「猫砂」新たな収入源に

## ヒノキ残材活用 シェア10%視野

「山を守る人材の雇用を確保するためにも、猫砂製造に参入した」という植竹社長(左から2人目)と大田原市南方の猫砂製造プラント

「山を守る人材の雇用を確保するためにも、猫砂製造に参入した」という植竹社長(左から2人目)と大田原市南方の猫砂製造プラント

「山を守る人材の雇用を確保するためにも、猫砂製造に参入した」という植竹社長(左から2人目)と大田原市南方の猫砂製造プラント



うえたけ・まさひろ 1964年、旧黒羽町生まれ。大田原高を卒業後、会計事務所、一徳酒造(小山市)勤務、海外駐在業務などを経て、2003年5月から現職。

「従業員」15人(パートを含む)

〈設立〉1913年  
 〈資本金〉1千万円  
 〈売上高〉1億8457万円(2009年3月期)

〈本社〉大田原市黒羽向町42  
 〈設立〉1913年  
 〈資本金〉1千万円  
 〈売上高〉1億8457万円(2009年3月期)

